
STEP

愛莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STEP

【Nコード】

N1036V

【作者名】

愛莉

【あらすじ】

学校や教師が大嫌いで、校則違反やサボりを繰り返している恵。だがある教師の一言をきっかけに、恵は少しずつ変わっていく・・・。

【シリアス恋愛小説】

廊下の窓から、桜の花びらが舞っているのが見える。保健室に向かいながら、まだ新学期が始まって一週間か……と考えていた。隣を歩く美咲は欠伸をしている。

私は学校が、そして教師というものが大嫌いだ。特に今年担任になった菊地は、教師の中でも最悪的に嫌い。菊池はまだ教師になって二年目のくせに、かなりウザイヤツだった。

生徒のひいきは露骨だし、頭髪検査では染めているかどうか見れば分かるのに、ベタベタ髪の毛を触ってくる。細かいことですが大声を上げるし。

そういう嫌な教師の授業を受けるほど、私も美咲も真面目じゃなかった。茶髪、ピアス、ギャルメイク——校則違反なんて当り前。学校なんて、真面目でいても損するだけだから。

真面目な様子、増して陰の努力なんて、誰も見ちゃいない。捻くれてるかもしれないけど、私には私なりのプライドがある。だから教師に何と言われようと気にしなかった。

授業開始のチャイムと同時に、保健室のドアを開けた。白を基調とした室内には、カーテンで区切られたベッドスペース、奥には養護教諭用のデスク、真ん中には大きめのテーブルが置かれ、その周りには椅子が並んでいる。

「貴子ちゃん、今から休憩ね」

椅子に座りながら、今年から新任として来た擁護教諭の貴子ちゃんに声をかけた。貴子ちゃんは器具を片付けながら返事をした。

「今日もおサボり？」

「だって生物ウザいんだもん。菊地の授業とか無理だし。高校最後の年なのに、菊池が担任になったせいで台無し」

美咲の言葉に「だよねえ」と頷く。

「まったく……。ここに居るなら一応、病人らしくしなきゃダメよ」

「あたしたちホントに調子が悪いんだよ。『菊池の授業に行きたくない病』でーす」

「美咲、上手いこと言うじゃん」

二人で笑っていると、保健室のドアが開いた。

「あ、恵と美咲もいたんだ」

そこには同じクラスの潤也が立っていた。

「やっぱ菊池の授業は無理だよな。しかも眠いし」

潤也は気怠そうに、私たちの前の椅子に座った。大きく伸びをしている。

私はもう一年くらい、潤也のことを好きでいた。そして――美咲も潤也が好きだ。私たちはお互いに潤也が好きだと知っていて、そういう意味ではライバルということになる。でもお互いに探りを入れたりしないし、そういう話題はほとんどしない。私は潤也と、今の友達関係で満足していたから。

ただ私には、美咲が何となく潤也に告白しようとしているような気がしていた。女の勘なんていうと大袈裟かもしれないけど、そん

なようなものだと思う。

でももしそうになったら、私と美咲の友達としての関係はどうなるんだろう。友情も恋も、そんなに上手くいくとは思えなかった。

生物の授業時間が終わり、保健室を出た私たち三人は、教室に戻る道を歩いた。その途中、運悪く菊地と鉢合わせしてしまった。菊地が怒った表情で近付いてくる。

「お前ら三人、どこに行ってた？」

「調子が悪くなったから、保健室に行っていました」

アンタの授業が嫌でね、なんて考えながら答えると、菊地は私たちを順に見た。

「三人そろってか？ 言い訳にならないぞ。大体、水沢と前田。その化粧はなんだ？ それにピアスもつけてるな？ 見せてみろ」

菊地が私と美咲に顔を近付けてくる。もう少しで息遣いさえも分かりそうな距離に近付いたとき、潤也が菊地の肩を押した。

「そんなに近付かなくても見えるだろうが」

「岡本、先生に向かってその態度は何だ」

「生徒に嫌がられてることくらい、気付いた方がいいと思いますけど？」

嫌味っぽい潤也を睨み付けた菊地は舌打ちし、「早く教室に戻れ」と言い残して私たちから離れていった。

「ありがと、助かった」

美咲が微笑むと、潤也はニヤッと笑った。

「ザマーミロって感じだな」

「ホントだね」

潤也と美咲は、声を出して笑いあっている。その様子を、少し不安に思いながら見つめた。私から見ると、こんな美咲の笑顔さえ怖くなる。もし二人が付き合ってしまったら――。

「メグ、どしたの？ 黙り込んでやって。まさか、菊池にビビってたとかあ？」

「そんなわけないでしょ」

「だよ。じゃ、教室に戻ろっか」

美咲が先に歩き出す。それに続こうとしたとき、横で立ち止まっていた潤也がポツリと呟いた。

「――美咲、ホントいいヤツだよな」

一瞬ドキッとして、潤也を見上げた。

「あ、いや。何でもない」

潤也は首を横に振ると、何も無かったかのように歩き出した。私は二人の背中を見て歩きながら、潤也の言葉の意味を考えていた。いいヤツ？ どういう意味なんだろう。何で潤也は、そんなことを口にしたんだろう……。

十
十
十
十
十

私と美咲はうるさい教室が嫌いで、昼休みは誰もいない講義室に來ている。生徒用の机と黒板、教卓しかない殺風景な教室だ。いつものように静かな講義室でお弁当を食べていると突然、美咲が話し始めた。

「あたし、この前、聞いちゃったんだよ」

「何を？」

「――あのさ、メグって今も潤也のこと好きだよね？」
急にそんなことを訊かれ、戸惑った。

「そりゃ好きだけど。何で今更、そんなこと訊くの？ 美咲は？」

「あたしはもういいんだ。なんていうか、すごく仲がいいから、好きだと勘違いしてたって感じ？ 憧れだったと思うんだよね」

それは、自分を無理に納得させてるみたいな口振りだった。

「そっか……。で、何を聞いたの？」

「えっと――。やっぱいいや」

「え？ 何それ。気になるんだけど」

口を尖らせると、美咲は誤魔化すように笑った。

「気にしない気にしない。……そういえば菊池に、もう三年も付き合ってる彼女がいるらしいよ？」

「マジ？ 彼女さん、物好きだね」

「でしょ？ 結婚も有り得るかもね」

美咲は話をそらしたいみだった。何か重要なことを隠されているような気がする。私が知ったら、何かのバランスが崩れてしまうような……。だから美咲が笑っているのを遮ってまで、訊いてはいけないような気がした。

1

翌日は一限から生物の授業で、私と美咲、潤也は保健室に来ていた。今は貴子ちゃんが出払っていないから、三人で独占状態だった。

「誰もいないと楽だね」

大きく伸びをする。美咲も頷いた。

「だよねえ。ずっとこうだったらいいのに」

そのとき奥のベッドで横になっていた潤也が起きてきて、保健室を出て行こうとした。ドアを開けているところに声をかける。

「どこ行くの？」

「教室」

「珍しいじゃん。菊地の授業なのに行くの？」

「一応、受験あるしさ。プリントだけもらってくるんだよ。授業は寝るけど」

「あ、そう」

呆れているうちに、潤也は出て行ってしまった。

「どうせ寝るなら意味ないのに」

美咲も呆れていた。

「まあね。でも頑張ってるじゃん。目標あるみたいだし」
すると美咲は、微妙な間を空けて笑みを浮かべた。

「じゃあ、メグが応援してあげなよ」

「え？ 何で私だけ……」

その瞬間、美咲の表情が曇ったのを見逃さなかった。昨日の様子

といい、やっぱりどうしても気になる。思い切って聞いてみることにした。

「ねえ美咲、私に何か隠してるんじゃないの？」

「――ごめん、メグ。あたし春休み、潤也に告った」

「え？」

「それで、フラれちゃった」

美咲が潤也に、告白するかもしれない予感はしていた。でもさすがに告白済みとは思わなくて、驚きで言葉を失った。

「呼び出して気持ち伝えたの。そしたら案の定って感じだけど『美咲のことは友達以上には見れない』って言われちゃった。……あ、別に抜け駆けしようとしたわけじゃないんだよ？　ただあたしは自分の気持ちが伝えたかっただけで」

振られた話をしているというのに、美咲の表情はいつも通りの明るさだった。

「それでね。あたし、潤也に『好きな人いるの？』って訊いたんだ。潤也、最初は本当のことを言おうとしなかった。それでも食い下がって訊いたの、『潤也の好きな人ってメグじゃないの？』って」

それを聞いて、背筋が凍るような緊張を感じた。

「そしたらね、『そうだよ』って。メグたち、両想いだったんだよ。あたしのことは気にしないでいいから、メグも潤也に気持ち伝えたら？」

美咲の言葉に、何も答えられなかった。というより、美咲の本心が見えなかった。振られて一ヶ月も経ってないのに、どうしてそん

な風に明るくいられるの？ 訳が分からなくて、潤也のことにまで頭が回らない。

そんな調子のまま迎えた昼休み後の授業、美咲が言っていたことについていろいろと考えているうちに、頭が痛くなってしまった。

次の六限は古典。特に大した授業でもないし、早退することにした。菊池に言うともた仮病だと思われるかもしれないから、菊池が他のクラスの授業に行っているときに、副担任に話して帰った。

でも結局、嫌なことが次の日に延びただけだった。十一時頃、授業中の時間を狙って学校に向かった。遅刻したときは職員室で遅刻届を受け取り、必要事項を記入して、印鑑をもらうシステムとなっている。

菊池が授業でいなければ他の教師に言える……と思いながら職員室を覗くと、そんな期待も虚しく菊池はデスクにいた。仕方なく嫌味を言われるのを覚悟で、菊池のところに歩み寄る。

「あ、水沢。昨日、何で帰った？」

ほとんどの教師が授業に出ていない中、菊池のいやに大きな声が響く。

「頭痛だけど」

「また仮病か？ ま、ここで待ってる。遅刻届、持ってくるから」

菊池は立ち上がり、遅刻届の入っている棚に向かった。

「――菊池先生、今朝から機嫌が悪いんだ」

後ろから声がした。振り向くと、後ろのデスクにいる教師が目に入った。一組の担任、中原だ。中原は二十代後半くらいの古典の教師で、私たち五組の授業も受け持っている。

新学期も始まったばかりだし、まだ一回しか中原の授業を受けたことはない。私は中原のことを知らないけど、しょっちゅう呼び出しをくらってるし、私のことは多少でも知られてるかもしれない。

「何で機嫌、悪いの？」

「今朝、ノートパソコンを落として壊しちゃったんだ」
いい気味、と言う言葉が出そうになって飲み込む。その間に菊池が戻ってきた。

「遅刻届がきれてるから印刷してくる。お前はさっさと授業に行け。『頭が痛いから保健室』、は通用しないからな。用紙はあとで取りに来い」

菊池はわざとらしく忙しそうにして、印刷室に入っていた。…最初から最後まで仮病扱い。担任とは思えない態度だ。まあ、あんなヤツに心配されても嬉しくないけど。

「ホント菊池先生、機嫌が悪いね。…で、今日は頭痛で遅刻したのか？ 昨日も授業、早退していなかっただろ」

そういや早退したの、中原の授業だっけ。

「まあね。あの人は仮病とか言ってるけど、ホントだから」
ふてくされると、中原は言った。

「大丈夫か？」

唐突な言葉に驚いた。そんなに知りもしない教師が「大丈夫か？」なんて、意外な言葉だったんだ。教師が体調不良の生徒を心配するなんて、当たり前といえど当たり前のことかもしれない。でも私にとっては経験のない言葉だった。

「別に、今は平気」

「そうか。じゃあ授業、行って来いよ。また調子悪くなったら、無理しないで休めばいいからな」

中原は自分のデスクに向き直り、ノートの点検を始めた。私も職員室を後にする。……中原か。あまり知らないヤツだけど、菊池よ

りはマシな教師かもしれない。

1

次の日、今度は美咲が体調不良で休んだ。「お大事」というメールを送り、一人で保健室に向かう。貴子ちゃんはいなかったけど、代わりに潤也の姿があった。私と同じく、生物の授業だからサボりにきたんだろう。

美咲にあの話を聞いてから、潤也に対してどう対応すればいいのか分からなくなっていた。それでも冷静を保ち、潤也の前の席に腰掛ける。

「今日は生物の授業、出ないの？」

「うん。昨日プリントもらったから、今日はここで自習。教室だと寝ちゃうし」

潤也は答えながらも、生物の問題を解いている。集中させてあげた方がいいかな。

「もしかして私、勉強のお邪魔だったりする？」

そう尋ねると、潤也は妙に真面目な顔をして私を見た。

「邪魔じゃないよ。……っていうより、恵がいなきゃここに来る意味ないから」

その言葉で動悸が激しくなった。

「俺、恵のことが好きなんだよ。——もしよかったら、俺と付き合っ
って欲しい」

ドキドキして言葉が出てこない。美咲が言ってたこと、本当だったんだ。

「恵はさ、俺のことどう思ってたんの？　ただの友達？」

「それは……」

そんなはずない。でもここで「好き」と口にしたら、美咲との関係はどうなっちゃうだろう。

戸惑いながら黙っていると、潤也は机に突っ伏した。

「そんなこと言われても困るよな。やっぱり俺ら、友達だし。ごめん」

「違うよ。私も……潤也のこと好きだったんだから。でも美咲だって——」

言いかけてやめた。潤也はもう知っているとはいえ、私がそれを口にしたら、二人に対して失礼だと思ったんだ。

「美咲なら、俺が恵のことを好きだって知ってるよ。でもアイツ、俺と恵のこと応援してくれるって言ってた。ホントいい奴だよな」

美咲、いいの？ 私だけが幸せな思いをしても。でも……それでも、傍にいる潤也を受け入れずにはいられなかった。

その夜、潤也のことで美咲に電話しようか迷った。でも体調不良で休んでるところにこんな話をするのもいけない気がして、結局やめた。美咲は次の日、元気そうに学校へ来た。それを見て少し安心した私は、今度こそ潤也とのことを話した。

「——そっか。良かったね、付き合うことになって」

美咲はごく普通に、笑顔で話を聞いていた。

「でもごめんね。美咲の気持ちも知ってるのに」

「あたしのことは気にしないでって言ってるじゃん」

「うん……」

私には、美咲が無理をしているようにしか見えなかった。

「あ、四時間目って古典だね？ お弁当、持ってっちゃおうか」
いつも昼休みに使っている講義室は、古典の授業で使われている。
授業が終わったらすぐ昼休みだし、ついでにお弁当も持って講義室
に行くことにした。

「――あ。古典の教科書、忘れたっぽい」

バッグを探ったけど、家に置いてきてしまったらしく、古典の教科書は見当たらなかった。

「ごめん、借りてくるから美咲は先に行ってて」

一人で教室を出ると、急いで隣のクラスの友達の前に行った。

古典の教科書を借りて講義室に向かい始めると、始業を知らせるチャイムが鳴った。急がないと言い訳が面倒だ。古典は中原の授業。あの日、職員室で話した以来の授業だ。悪いヤツじゃなさそうだし、適当に受けておけば――。そんな風に考えながら、私は廊下を走った。

「起立、礼」

ギリギリのタイミングで講義室に入る。級長の挨拶に紛れて席に着くと、溜め息をつきながら机に伏せた。でもそのとき、中原の声が聞こえた。

「今から古典単語の小テストをやるぞ」

反射的に起き上がる。テストやるなんて言ってたっけ？ ……そうか、前の授業は早退したから知らなかったんだ。

「テストと言っても、普通のプリントだと思って気楽に解けばいいからな」

中原はプリントを配り終わると、問題を解き始める生徒たちを見回り始めた。ボーっとして注意されても面倒だし、仕方なくシャーペンを握る。『次の語句の意味を書け。問一・らうがはし』――って、もう分かんないし。いきなりつまずいて、余計やる気が失せた。

そのまま何も書かずにぼんやりしていると、教室を回っていた中原が私の前で止まった。そして私のプリントを指差した。

「問一は、水沢のことだな」

小声でそう言われ、問一を見た。私のことって言われても、見当がつかない。でも中原は相変わらず私を見ていたから、仕方なく適当に呟いた。

「おしとやかだ……とか？」

そんなはずないか。自分で自分に呆れていると、中原は苦笑した。「違う違う。『らうがはし』は、この文中の意味だと『騒がしい』だ」

何となく恥ずかしく思いながらも、回答欄に「さわがしい」と書いた。すると中原は私から離れて見回りを再開した。他の生徒にも何やら言っている。

私にだけ話しかけたわけじゃないんだよね。そんなことを考えながら、もうこっちには回って来ないだろうとシャーペンを投げ出した。

それから数分でテストが回収され、授業が始まる。

「じゃあ教科書、八ページを開いて」
ぼんやりと、中原が文字を書く手を追う。

「――それじゃあこの現代語訳を、水沢」
突然のことに焦った。しばらくボーっとしていて、どこのことを言ってるのか分からない。

「ちゃんと聞いてなさい。九ページの十行目だ」
パラパラと教科書をめくり、目的のページを開いて答える。
「おっ、なかなか答えられるな。実力がついてきてる証拠だぞ」

教科書に目を落とした。さっき借りてきた教科書。隣のクラスは

うちより授業が進んでいて、もうこの現代語訳が書き込んであった。つまり考えたわけではなく、答えを読んだだけ。それから当たられることもなく授業が進んでいった。私は授業が終わるまで、黒板に向かう中原を何となく見つめていた。

潤也と付き合い始めて約一週間。放課後、私たちは一緒に教室を出た。私も潤也も電車通学だから、今日から駅まで一緒に帰ることにしたんだ。そこからはお互い別方向だけど。

「今日も一日、疲れたな」

校門を出ると、潤也は両手を挙げて伸びをした。

「ねえ、恵っていつから俺のこと好きだったの？」

「は？ 普通そんなこと訊く？」

照れて言うのと、潤也は楽しそうに笑った。

「別にいいだろ。ちなみに俺は半年くらい前だったかな？」

「……そうなの？ 私の半分じゃん」

「じゃあ恵は、一年も前から俺のこと？」

ドキッとした。潤也はさらに楽しそうにしている。

「嬉しいな。恵の方が前から好きでいてくれたなんて」

「ちよっと、からかわないでよ……」

呆れながらも、こんな会話が嬉しくて潤也の横顔を見上げた。

駅に着いた頃、空は暗くなっていた。それでも帰宅ラッシュにはまだ少し早く、辺りにはあまり人がいない。

「じゃあまた明日な。気を付けて帰れよ」

「うん、じゃあね」

そのとき——ふと潤也の顔が近付いて、唇が重なった。顔を離した潤也は、照れたような表情で私を見た。そんな表情を見たのは初

めてで、何だか嬉しくなる。

「迷惑じゃなかった？」

「そんなわけないじゃん。ありがと」

「良かった。……それじゃ帰るよ」

「うん。またメールするね」

お互い笑顔で手を振って別れた。まだ胸がドキドキしている。初めてキスを交わしたことで、潤也との距離がぐっと縮まったような気がした。

十
十
十
十
十

それから一週間ほど経った、ある日の放課後のこと。私と美咲は突然、菊地の呼び出しにあった。理由はよく分からなかったけれど、二人で職員室に行くと、菊地は厳しい表情で私たちを見た。

「水沢、前田。お前ら二人とも、明日までに身だしなみを整えてこい」

何を今更。校則違反なんて前からのことだし、放課後にわざわざ呼び出して言うことじゃないと思うんだけど……。

「まず髪の毛を黒くしてこい。化粧もするな。ピアスは今、渡しなさい」

私と美咲は、大人しくピアスを外して菊地に渡した。

「大体お前ら、最高学年の自覚があるのか？ そんなにチャラチャラして」

菊地の声が大きくなってくる。今日は相当、機嫌が悪いらしい。

「お前らみたいなどうしようもない生徒がいるから、上から注意がくるんだぞ」

生徒指導部かどっかから、私たちのことで菊池が注意を受けたのかも。だからこんなに機嫌が悪いのか……。

「黙ってないで何とか言え！」

菊池の声の大きさが増したとき、私たちの後ろから「菊池先生」という声がした。振り返ると、コーヒーカップを手にした中原が立っていた。

「そんな注意の仕方じゃ、生徒は聞いてくれませんよ」

「でも中原先生、こいつらはこんな格好で……」

「怒鳴ってるだけじゃ何の解決にもならないです。水沢、前田。少しずつでいいから、ちゃんと直せよ。あまり菊地先生に迷惑かけないようにな」

中原は私たちを交互に見た。菊地は依然ムツとしている。

「分かったら、もう帰っていいぞ」

私たちは返事だけして職員室を出た。美咲は溜め息を漏らしている。

「中原ってうるさそうだけど、意外といいヤツだったね」

美咲の言葉に頷いた。

「まあ、どうせ直す気はないけどさ」

そうだ。注意されるのはいつものことだから、直す必要もない。

そんなことを考えていると、前から潤也が歩いてきた。

「呼び出し終わった？」

「うん。今日の菊地、いつもより機嫌が悪くてさ。あたしたち、八つ当たりされたみたい」

潤也は「それはお疲れ」と笑った。

「——えっと。お邪魔しちゃ悪いし、あたしは帰るね」

私たちに軽く手を振ると、美咲は足早に廊下を曲がっていった。そんな姿を見たら、何となく美咲を傷付けているような気がした。

「俺たちも帰るか」

潤也の言葉に引き戻され、私は慌てて頷いた。――と、職員室から中原が出てきた。

「あ、中原じゃん」

潤也は親しげに、中原に声をかけている。

「岡本か。最近、真面目に勉強してるみたいだな。四月の学力テストの結果、良かったじゃないか」

「そうなんだよ。俺、成長しただろ」

「でも、まだまだ伸びるぞ。ちゃんと勉強しろよ」

中原は潤也に微笑むと、職員室横の階段を上がっていった。

「潤也、中原と親しいの？」

「一年のとき担任だったんだ。迷惑かけてたから、未だに心配されてんの」

「いいヤツなの？ 潤也が教師と親しくするなんて」

「うん。菊池よりよっぽど話せるヤツだよ」

「そうなんだ」

別にそんなの、どうでもいいことだけど。

いつものように学校を出て潤也と歩く。駅のすぐ近くまで来ると、駅近くにあるショッピングセンターの看板が目に入った。

「ねえ潤也、ちょっとあそこ寄っていい？」

「いいよ。何か買うの？」

「ちょっと見るだけ」

潤也と手を繋ぎながら、ショッピングセンターに足を踏み入れる。向かう先はコスメ関係の売り場だ。でも見たいのは化粧品じゃなくて、ヘアカラー。私は適当に選んだ黒染め用ヘアカラーを手にとって、

た。

「髪の毛、黒くするの？ 菊地に怒られたから？」

「違うよ。ただの気紛れ」

「そっか。ま、恵の好きなようにしなよ」

潤也の言葉に頷くと、私は手にした黒染め用ヘアカラーを買った。

髪を黒くして学校に行くと、美咲がすぐに駆け寄ってきた。

「ちよっとメグ、黒染めしたの？」

「うん。悪くないでしょ、黒髪も」

「そりゃそうだけど……。菊地の言うこと、気にして？」

潤也も美咲も、同じことを思っているみたいだ。でもそれは違う。中原が「少しずつでもいいから直せ」って言ったから？ 少しずつなら私にもできると思ったから？ それも違う。

「メグがいいなら、いいんだけどね。次、講義室だから。行こ」
私たちは並んで講義室に向かった。次は古典の――中原の授業なのだ。

講義室に着いたときはもう、ほとんどの生徒と中原がいた。こっちに気付いた中原は、私を見て微笑んだ。

「髪の毛、黒くしたんだな」

「別に、菊池のためじゃないから」

何となく、中原から顔をそらす。

「理由はどうであれ、いいことだ。前田は黒くしないのか？」

「あたしは絶対イヤ」

「ははっ、頑固だな。まあいい、早く席に着けよ」

中原は他の生徒にも、同じく指示を出した。そして授業が始まる。

この日は運が悪く、一発目で当てられてしまった。

「じゃあ水沢、十五行目を訳して」

いきなり当てられるわけがないと思ってぼんやりしていた私はハッとした。

「……分かりません」

「いや、ちゃんと考えれば分かるから。単語帳を開いて見てみる」

何でそんなこと言われなきゃいけないのと思いつつ、焦って単語帳をめくった。でも静まり返った講義室がプレッシャーになって、なかなか目的のページが見つからない。今までこんなことをしたことがなかったんだ。どの教科も適当に「分かりません」と言い続けて、それで済ませてきたから。

講義室にページをめくる音だけが響く中、中原が突然、口を開いた。

「焦らないで、ゆっくり調べればいいぞ」

顔を上げて中原を見た。目が合うと、中原は無言で頷いた。

私みたいに時々、答えが分からなくて固まってしまいう生徒もいる。でも、こんな風に声をかけていたことはなかった気がする。

もちろん中原は何の意識もしていないんだろうけど、偶然でも優しい言葉をかけられたことで——少しだけ、プレッシャーが薄れたような気がした。

目的のページに辿り着き、何となくそれっぽい感じで言ってみる。「うん、大体それでいいぞ。ただ最後のところは推量ではなく……」私の答えを少し訂正しながら、黒板に書き始める中原。私は沈黙となった恥ずかしさを今更ながら感じて、机に突っ伏した。

それからしばらく経ち、古典の授業がもうすぐ終わるという頃。時計を見ながら、教科書を片付け始めた。

「今日はノート集めるぞ。後ろの人、集めてきて」

中原の言葉で、講義室内に小さなどよめきが広まった。

「普段からちゃんと黒板を写してれば、慌てることはないんだぞ？授業でやったことが書いてあるか見るだけだからな」

自分のノートを持って立ち上がった。今日は当てられたこともあったから、念のため適当にだけノートを取っていたんだ。列の人のノートを集めて、教卓の前に立つ中原に持っていった。

「ありがとう」

受け取った中原の言葉に返事をすることなく、そのまま席に戻った。

その日の帰り、いつものように潤也と教室を出た。付き合い始めて半月ほど経って、潤也との関係にもだんだん慣れてきている。それでも手を繋げば緊張するし、ドキドキした。友達としての期間が長かったせいかもしれない。

暗くなった駅までの道を二人で歩く。今日は週末ということで、学校から近いファミレスでご飯を食べてきた。だからいつもより帰りが遅くなっている。

「今日、何かあったの？ 元氣ないように見えるけど」

突然、潤也に尋ねられた。私は首を横に振ると、「そんなことないよ」と返した。

「そっか、よかった。何となく元氣なさそうに見えたからさ」

ちょっとした表情でも、心配して気を遣ってくれる潤也。こんなにも私を好きでいてくれると思うとやっぱり嬉しい。駅の入口から少し離れたところに行くと、人通りが少ないのいいことに潤也の胸に顔を埋めた。

「少しだけ……こうしていい？」

潤也は何も言わずに、優しく抱き締めてくれた。でもその心地よさに浸り始めてすぐ、潤也は突然、私の肩を掴んで放した。

「ごめん、嫌だった？」

「あっ、違う違う。今、ウチの教師が通ったから」

後ろを向いたけど、そこには駅の入口があるだけで誰もいない。

「中原が通ったんだよ」

「……えっ？」

妙な間。潤也は不思議そうに首を傾げた。

「中原がそこを通ってさ、目が合っちゃって。恥ずかしくて、つい放しちゃった。痛かった？」

「ううん、何でもない。教師に見られるなんて、思ってもみなかったから」

心臓の音が頭に響く。教師に見られたから、こんなにドキドキしているんだろう。それが中原だったからじゃない。

家に帰ると、二階にある自分の部屋に入ってバッグを下ろした。何だか妙に疲れてる気がする。ベッドに転がって寝ちゃおうと思っただけど、メイクを落とさなきゃ肌が荒れちゃうし……。

溜め息交じりに着替えると、メイクを落とすために一階の洗面所に下りた。鏡で自分の顔を見る。髪を黒くしたせいか、今のギャルメイクが不自然な感じ。

私はお風呂に入る前に、今の黒髪に合うメイクを考えてみることにした。まず青いアイシャドウを落とし、黒いアイラインだけ引いた。ピンク色のチークを拭い、薄めのオレンジ色に変える。唇は赤いリップをやめて透明なグロスを塗った。

……ナチュラルメイクすぎるかな。でも今の髪の色には、このメイクの方が合ってるし。これからはこのメイクで学校に行こうと決めた。

ナチュラルメイクは美咲に不評で、「そんなスッピンみたいなのでいいの?」と言われた。でも潤也は「その方が良いよ」と言ってくれた。黒髪とナチュラルメイクのためか、菊池に睨まれることも何となく少なくなったような気がする。

「何してるの?」

朝のホームルームが始まる前、美咲は手元を見た。私は古典の単語帳をパラパラめくっていた。

「授業まで時間あるし暇だから」

「だからってそんなの見なくてもいいじゃん。こっち見ようよ」

美咲は愛読ファッション誌の最新号を、私の机にバサッと広げた。

「没収されるかもよ」

「言い返せばいいでしょ、そんなの」

私は古典の単語帳をバッグにしまうと、美咲と雑誌を見始めた。

そのとき、前の席からノートが回ってきた。集められていた古典のノートが返ってきたらしい。ノートを開くと、最後のページには赤ペンで大きく「Excellent」と書かれていた。かなり適当に書いたノートだったのに「Excellent」なんて。

「メグ、こんな真面目にノート取ってるの? あたしなんかほとんど白紙で出したから、きつと再提出になってるだろうな」

「暇だったから適当に書いただけだよ」

「ま、あたしは再提出だろうと出さないけどね」

美咲は笑っている。私も美咲と同じことを言って笑ってる方が「

らしい」のかな、なんて考えがふと浮かんだ。

ノートが返ってきたのは、この日も古典の授業があるからだった。昼休み前の授業だから、講義室までお弁当も持っていく。授業が終わると、中原が出て行くのを待っていた。本当は教室でお弁当を食べなければいけないという決まりだから、中原に見られると面倒なんだ。

美咲と雑談しながら様子を伺っていると、クラスの女子が教科書を広げて、中原のところへ駆けていった。

「中原先生、ちょっとここ教えてほしいんですけどお」

「ああ、結構みんなが苦手とするところだな」

中原はその子から教科書を受け取ると、黒板の前で説明を始めた。その様子を見て、美咲は小声で言った。

「タイミング悪いね。早く出てってくんないかな」

私も黒板の方を見る。

「先生、ここは？」

「この文中だと、『とも』は終止形接続だから逆接の仮定条件で……」

「それが分かんないんですってば。どうやって見分けるの？」

二人は笑い合っていて、文法のことを話してるだけのくせに、何だか楽しそうにしていた。こっちはお昼ご飯を食べるの待ってるっていうのに。

「……ムカつく」

思わず口をついて出てしまった。

「ただ質問したくらいで、笑いながら喋る必要があるわけ？」
続けて言うと、美咲は「どうでもいいじゃん」と笑った。

「中原たちが笑ってようが、あたしたちには関係ないし」
確かにそのとおりだ。私は一体、何を言っているんだろう。

その午後からは、何だかぼんやりしていた。何があったわけでもないのに、何故か心に靄^{もや}がかかったようにすつきりしない。帰り道、潤也と歩いていても――頭の中は真っ白で、話に返事をするくらいしかできなかった。

駅に着いたとき、潤也は私の腕を引いた。

「恵、どしたの？ ボーッとして」

また潤也を心配させている。これじゃ彼女失格だ。

「ごめん。大丈夫」

それでも潤也は、心配そうな表情をしたままだ。

「もし辛いこととかあったら、何でも遠慮せずに言えよ？ 俺にできることなら何でも協力するしさ」

私には、こんなに優しい彼氏がいる。大切にしくちやいけないんだ。潤也は温かい手で、私の頭をそっと撫でてくれた。もうこんな訳の分からないことで、潤也に迷惑をかけないようにしよう――。

十
十
十
十
十

とある休日。私は美咲と、市外のショッピングモールに買い物しに行った。久しぶりの買い物を楽しんだあと、私たちは夕食をとるためレストランに入った。

「ちょっと買い過ぎたかな」

「ホント、服ばかり買ったね」

そんな会話をしながら席でメニューを広げていると、しばらくして私たちから少し離れた席に、ベビーカーを引いた男女が入っていた。何気なくそちらを見て……私と美咲の動きが止まった。

「ウソ、中原じゃん」

美咲が呟く。そこに現れたのは、教師ではなく「父親」としての中原だった。

「中原って結婚してたんだね。子供もいたんだ。ね、奥さん美人じゃない？」

そうだ。中原には中原の生活がある。私は教師としての姿しか知らなかったのに――。

「メグ……？」

目の前にいる美咲を見ようとした。でもダメだ。表情が固まってしまう。

「――ねえ。メグって中原のこと、どう思ってるの？」

何も思ってたんじゃない。そう答えようとした瞬間、美咲の声が重なる。

「まさか、中原のことが好きとかじゃないよね？」

完全に疑われている。このままじゃ、本当に誤解されてしまうかもしれない。

「そんなわけないじゃん。私が教師なんか好きになると思う？」

「メグが誰を好きになっても、あたしが口出しできることじゃないけど……。潤也は？　もう潤也のこと、好きじゃなくなったの？」

突然、美咲は涙声になった。

「あたしは潤也とメグが両想いだったから、自分の気持ちを押し殺してでも二人に付き合ってたの。でもメグ、本気じゃないの？ そんな潤也が可哀相じゃん」

美咲の頬を、涙が伝う。やっぱり、ずっと無理してたんだ。

「ごめん。でも私、ちゃんと潤也のこと好きだから。ごめんね」

「……ううん。あたしの方こそ、急に変なこと言ってごめん」

お互い謝ったけど、気まずさは残ったままだった。——潤也だけじゃなく美咲にまで迷惑をかけてしまうなんて。最低だ、私。

その日は何となくギクシャクしたまま帰ったけど、翌週の学校では今まで通りの態度で美咲に接してみた。美咲も普通に接してくれた。

「次の授業、菊池だよ。サボろっか」

美咲の言葉に頷いて保健室に行くと、そこには潤也が来ていた。

「今日は菊地の授業、出なくていいの？」

美咲が訊くと、潤也は手元のプリントをひらひらさせた。プリントだけもらってきたらしい。私と美咲は並んで、潤也の前の席に座った。

「よく頑張るね。どこの大学に行くの？」

「一応、国公立狙ってるよ。まだはっきり決めてないけど」

「へえ……」

美咲は頷きながら潤也のプリントを見ていた。

「メグは大学、行かないの？ 最近ノート取ってるでしょ？」

「私は余裕で無理かな」

「それ、微妙に日本語になってないよ」

美咲が笑うと、潤也も「美咲、ナイス突っ込み」と笑った。三人でこういう他愛もない会話するのは久しぶりな気がする。潤也と付き合い始めてからはどちらかと二人になることが多くて、三人で話すことは少なくなっていたから。

そのとき、保健室のドアが開いた。そこにいたのは――中原だっ

た。驚いて目をそらす。美咲も気まずそうな顔をしていた。何も知らない潤也だけは、中原と話し始めている。

「お前ら、こんなところで堂々とサボりか」

「ちゃんと勉強してるって」

潤也は中原にプリントを見せた。

「中原こそ何でこんなところに？ まさか貴子ちゃん目当て？」

「何言ってるんだ。朝から少し熱っぽかったから、薬をもらおうと思って。貴子先生は？」

「さっき、どっか行くなって出てったんだけど。どこ行っただっけ？」

潤也は私に話をふった。やめて、そんなこと私に訊かないで……。

言葉に困っていると、代わりに美咲が答えた。

「内科検診の教室を準備しに行ったよ」

「そうか。じゃあそのうち戻ってくるよな」

中原は私の前、潤也の隣に座った。

「生物のプリントか。懐かしいな」

「ちよっと中原、教えてよ。これ分からないんだけど」

「どれ？ ……分かんないな」

中原は照れたような笑いを浮かべている。

「――私、ちよっとトイレ行ってくる」

思わず立ち上がった。

「あたしも」

美咲も慌てた様子で立ち上がる。足早に保健室を出てトイレを済ませると、美咲は眉間に皺を寄せて壁に寄りかかっていた。

「メグ、あの態度はどういうこと？」

「……サボってること、菊地にバレたら嫌だなんて」

「ウソだよ！」

美咲はじつと私を見た。

「あたしはね、潤也のことだけが言いたかったんじゃないの。あたしたち友達でしょ？ 何でホントのこと言ってくれないの？」

その言葉が妙に重く感じる。

「……違うよ。中原のことは教師の中ではマシな方かなあ、くらいしか思っていないから。アイツは教師で、しかも結婚してるし、年だって離れてて、私たちから見たらオッサンでしょ。あんなヤツ、好きになったりしないってば」

言い切ると、美咲は少し沈黙した後で頷いた。

「分かった。ホントに好きなら、さすがにそこまで否定できないよね。――戻ろ」

保健室へ戻る廊下を、私たちは無言で歩いた。

その日の帰り、潤也が服装の乱れで菊池に呼び出されてしまい、私は一人で教室に残っていた。窓からは野球部やサッカー部が練習しているが見える。

「ごめん、お待たせ」

入ってきた潤也は、新入生みたいな制服の着方をしていた。私は自分の席に置いていたバッグを掴むと、潤也の席まで歩み寄った。

「マジ最悪。服装が悪いから成績も悪いんだとか言われて」

愚痴を言いながら、潤也はシャツのボタンを外した。

「何それ。服装と学力は関係ないのにね」

「だろ。アイツだけはマジ勘弁だし。まだ中原みたいな教師に言われる方がマシだったの」

急に中原の名前が出たのにドキツとしながら、「そだね」と返した。

「そういえば今日、保健室に中原が来ただろ？ あるとき恵たちが出てってから言われたんだ」

「何を？」

「『お前、水沢と付き合ってるんだな』って」

その瞬間、胸が締め付けられるような感覚がした。

「前に駅で見られたときのこと覚えてたみたい。中原もそういう話するんだなって、結構ビビったし。でも中原マジ面白くてさ、俺が――って、恵？」

「え？」

どうして……涙が出るの……？

「俺、何か変なこと言った？ 何で泣くんだよ」

潤也は私の肩を掴んだ。どうして涙が出るのか、自分だって分からない。

黙っていると、潤也は私を抱き締めた。動悸が激しくなる。——でも、好きだからドキドキしてるんじゃない。この動悸は、潤也に対する「後ろめたさ」なんだ。それに気付いてしまった。というより、気付かないフリをしようとしてる自分に気付いてしまった。

潤也は腕を放すと、今度は顔を寄せてきた。——キスされる。そう思った私は、反射的に顔をそらした。それでも潤也はキスしようとしている。ここで避けたら潤也は傷付くかもしれない。それでも今の私に、キスを受け入れる資格なんてなかった。

「……ダメ」

呟くと、潤也は顔を離れた。

「ごめん。今日は一人で帰る」

私は潤也を残したまま、逃げるように教室を出た。

——本当はもう、とっくに気付いてたんだ。中原のことが、好きだって。でも私のプライドが許さなかった。学校や教師が大嫌いなのに髪の色やメイクを戻したりなんかして、何かの色に染まってしまったような感覚が認められなかった。それでも結局、私は変わってしまったんだ。

教師だから、結婚しているから、年が離れているから……。そうやって自分を納得させて、気付かないフリをして自分の気持ちを誤魔化していた。

それでも今ここに残ったのは、ただ「好き」という一つの事実だけ。結局は最後まで、潤也と美咲に酷いことをしてしまってたんだ。

潤也は次の日、学校を休んだ。体調不良なのか、それとも別の理由なのかは分からない。朝のホームルームが終わった後、美咲が席まで来た。

「メグ、話があるの。次の授業サボろう」

美咲の話——何となく見当がついた。

二人で教室を出ると、使われていない講義室に入った。

「昨日の夜、潤也から電話があったよ。あたしに相談するのは迷ったみたいだったけど、他に話せる人がいないからって。話の流れは聞いたよ。でもメグが泣いたのは、潤也のせいじゃないでしょ？」

美咲の視線が重くて、私は俯いた。

「——ねえ美咲。私、好きになっちゃいけない人を好きになっちゃったよ」

その瞬間、美咲が溜め息をつくのが聞こえた。

「どうして、もっと早く言ってくれなかったの？」

「ごめん。教師なんか好きになるはずないって……ずっと気付かないフリしてた」

講義室に沈黙が広がる。その空気はあまりにも重く感じられたけど、やがて美咲が「もうやめよ」と呟いた。

「こんな空気、あたし耐えられない」

「ごめんね」

「謝らなくていいよ。うちら友達じゃん。でも……もしあたしがまだ潤也のこと好きでいても、あとで文句言わないでよ？」

美咲の言葉に、私ははっきりと頷いた。

その日の学校帰り、潤也の家に寄ることにした。潤也の家に行くのは初めてだ。休みの日に会っても、外に出かけてばかりだったから。私は潤也に電話して、家に寄っていいか訊いた。

会ってくれるか不安だったけれど、潤也は「いいよ」と言ってくれた。簡単に道のりを聞いて、駅から徒歩数分のところにある潤也の家に向かう。何となく、足が重かった。

家に着くと、緊張しながらインターフォンを押した。すぐに戸が開いて、出てきた潤也は私を中に入れてくれた。家には今、誰もいないらしい。

「今日、どうしたの？」

「ちょっと頭が痛くてさ。今はもう大丈夫だけど。ズル休みじゃないからな」

潤也の部屋に入る。ベッドと勉強机、マンガばかり並ぶ本棚。ここに来るのは最初で最後になるだろう。何となくそう思うから虚しい。私たちは部屋の真ん中に置かれていた小さな木製テーブルを挟んで、向かい合うように腰を下ろした。

「今日は話があって来たの」

潤也は私に何を言われるか、悟っているかのように頷いた。

「ごめんなさい。私もう、潤也とは付き合えない」

頭を下げると、潤也はしばらくして口を開いた。

「好きなヤツができたのか？」

「……うん」

「誰？」

その問いに答えるべきか迷った。それでもやっぱり、伝えなければいけないような気がした。

「中原……」

潤也は悔しそうに、大きな溜め息をついた。

「アイツ、結婚してんじゃん。分かんねえよ、恵が考えてること」

「ごめん。でも私、中原のことが――」

「それ以上、言うな」

言葉を遮った潤也は、悲しそうな表情で私を見た。

「……そうだな。恵が別のヤツを好きでいるのに、付き合っても無意味だよな」

「潤也、ホントにごめんね」

謝ったけど、潤也は返事をしなかった。そして一言、「もう帰ってほしい」と言った。

せっかく掴んだ幸せを、自ら捨ててしまったみたいなものだ。それでも中原のことを思うと、潤也と別れたことは正しい選択だったのだと思う。

帰り道、美咲に電話して別れたことを伝えた。美咲は相槌を打って話を聞いてくれていたけど、最後に「本当に良かったの？」とだけ訊いてきた。私は迷うことなく頷いた。

翌日、美咲とはいっても通りに過ごしたけど、潤也とは口をきかなかった。わざと避けているわけじゃない。自然とそんな感じになった。でも帰り、潤也に声をかけられた。「話があるから講義室で待ってる」と。

私は帰り支度を済ませると、指定された講義室に行った。窓際の席で、潤也は気だるそうに座っていた。その前の席の椅子を出して座る。潤也は黙っていた。私も何を言えいいのか分からなくて俯いていると、しばらくして潤也が沈黙を破った。

「――やっぱりさ、納得できねえよ」

呟きのような言葉に、私は顔を上げた。

「恵、学校も教師も嫌いなんじゃなかったのかよ」

「それはそうだけど……」

はっきりした理由なんて見つからなかった。いつの間にか中原のことを好きになっていく自分がいた。ただ、それだけのこと。

「恵、言ったよな？ 俺のこと、一年も前から好きだったって。それなのに何でそんな簡単に、教師なんか恋するんだよ。何で恵より後に好きになった俺の方が、こんなにボロボロなんだよ！」

潤也は声を荒げながら、前髪をクシャッと掻きあげた。――対して私は、小さく呟いた。

「簡単なんかじゃないよ」

意味が分からないといった様子で、潤也が私の目を見ている。

「私だって、好きになりたくなったわけじゃないもん」
そんなことを口にしていた。潤也に言うべきことじゃないのは分かっているのに、言葉を押さえることができなかった。

「俺じゃダメなのかよ……」

悔しそうに呟く潤也。どうしてそんなにも繋ぎ止めようとするの？
私は潤也が思うほど、いい女なんかじゃないのに。

「——ごめん。自分がこんなに諦めの悪い人間だなんて、初めて知ったよ」

潤也は苦笑すると、急に立ち上がった。

「時間とらせて悪かったな。俺さ……しばらくは、恵と距離を置くことにするよ。それで完全に諦めがついたら、そのときはまた友達として仲良くしたいし」

立ち上がりながら頷くと、潤也は「帰るか」と言った。二人で講義室を出る。校門まで来ると、そこで別れることにした。

「じゃあ、またな」

潤也の顔は、さっきより少しだけ落ち着いて見えた。

「……うん」

私は潤也の顔を見上げながら呟いた。申し訳ない気がしたせいもあって、しっかり声が出なかった。潤也は小さく頷くと、駅とは別の方向へ歩き出した。——その後ろ姿は見えない。振り返ってはいけないような気がした。

次の朝、学校に来た潤也は「おはよう」と声をかけてきた。私も「おはよう」と返す。私たちの間には、それだけの会話しかなかった。でも気まずい思いをしているわけではないし、これでよかったと思う。

代わりに、私の心は苦しみを訴えていた。自分で本当の気持ちを認めてしまったからだ。教師と生徒という立場上、告白することなんて許されないし、もし言えたとしても迷惑なのは分かりきってる。それに結果だって決まってる。

でも本当は、気持ちだけでも伝えたかった。今まで抑えてきた反動なのか、そんな思いが心の中で渦巻いていた。

しかもそれに加え、古典の授業に出るのが辛くなってきた。叶わない気持ちを抱えて中原の授業を受けるのが苦しい。授業で当てられるときに「水沢」と名前を呼ばれるだけで、胸が痛かった。

そんな思いをしながらも時間は過ぎて、美咲とも恋の話ができるようになっていた。といっても、私は基本的に聞き役。美咲はから潤也と距離を縮めていきたいと言っていた。

「じゃ、またあとでね」

ホームルームがもうすぐ始まる。私の席で喋っていた美咲が戻っていくと、私は使わない教科書やノートをロッカーにしまいに行こうと立ち上がった。ロッカーの前では、男子たちが取っ組みあつてふざけている。

「ねえ、邪魔なんだけど」

そう声をかけたときだった。取っ組みあっていた男子の一人が私にぶつかってきた。バランスを崩して倒れ、教科書とノートが中を舞う。それが床に落ちたとき、上に別の男子が倒れるとともに、ビリッという紙が破れる音が聞こえた。

「水沢さん、ごめん」

それに返事をすることなく、私は教科書とノートを下敷きにしている男子を押しつけた。下から、無残に破れたノートと教科書が出てくる。

拾い上げると、破れたノートは古典のものだった。前に提出したとき中原が書いてくれた「Excellent」の文字が、真つ二つになっている。

——そこに涙が落ち、文字が滲んだ。どうして、こんなことまで……。ただノートが破れただけ。それなのに、こんなにも中原への思いを感じさせられる。

「メグ、大丈夫？」

事に気付いた美咲が、私の元に駆け寄ってきてくれた。美咲の手を借りて立ち上がる。ぶつかってきた男子たちも、みんな立ち上がってしおらしくしていた。

「これ、古典の……」

私の手元に気付いた美咲は、男子たちを睨みつけた。

「アンタたちのせいで、メグのノート破れちゃったじゃん」

「美咲、もういいよ」

拾ったノートと教科書をぎゅっと抱き締める。

「ホントごめん……」

男子たちが口を合わせる。それに応えることなく、「保健室に行ってくる」ただけ呟いて教室を出た。教室内は私たちの様子が伝わったのか、いつの間にか静かになっていた。

保健室の扉を開けると、テーブルに向かって書き物をしていた貴子ちゃんが顔を上げた。

「どうしたの？ ホームルームは？」

「ちょっとね」

曖昧な返事をして、貴子ちゃんの正面に座った。テーブルの上に持っていたノートと教科書を置く。

「どうしたの、それ」

貴子ちゃんは破れたノートと教科書を見た。

「……何かあったのね。話、聞いわよ？」

戸惑った。いくら聞いてくれるとはいえ、内容が内容だし。受け入れてもらえるか不安だった。でも今、話を聞いてくれるのは貴子ちゃんだけだろう。他に相談できる人なんていない。

「貴子ちゃんは……生徒に告白されたことある？」

「私、まだ養護教諭になって半年よ？ 生徒との関わりだって十分じゃないのに」

そんなことすっかり忘れていた。保健室で過ごす時間が長くて、ずっと貴子ちゃんと一緒にいるみたいな気がしていたから。

「恵ちゃん、誰か先生のこと好きなの？」

「——うん。しかも結婚してる」

「そう……。告白するつもりなの？」

何て答えばいいのか迷った。でも取りあえず、本心ということで頷いた。

「告白したら、先生は何て言うと思う？ 『憧れだろう』で済まされるかもしれないし、真面目に話を聞いてくれないかもしれないし、気まずくなるかもしれない。」

もし告白してるところを誰かに見られたりしたら……変に噂されたりして、大変なことにもなりかねない。結婚してる先生なら尚更よね。

それに恵ちゃん自身も、本当に本気だって言える？ 何かのきっかけで先生に憧れて、好きだと勘違いしてるかも知れないでしょう？ 先生に対する恋は一時的な感情かもしれない。それなら気まずくなるようなリスクを負ってまで、告白しない方がいいと思うわ」

「――それでも私は！」

憧れなんかじゃない。それは自信を持って言い切れる。

「学校も教師も嫌いで、言いなりなんかにならない思ってた。確かに少し身だしなみを直したのとかサボる回数が減ったのは、その先生のおかげかもしれない。けど、それは恋愛とは関係なくて。」

叶わない恋だっことも、告白したら迷惑になるっことも、ちゃんと分かってるよ？ でも気持ちを押し殺してるだけなんて嫌。伝えることすらできないなんて、好きになったことを後悔するかもしれない。自信を持って……中原に好きだって言いたいよ」

思わず名前まで口にしてしまっていた。

「――中原先生のこと、好きなのね？」

「恵ちゃんの気持ちは分かったわ。どうしても譲れないなら、告白してみたら？」

「……でもさっき『やめた方がいい』って」

貴子ちゃんはふっと笑みを漏らした。

「恵ちゃんの気持ちを試したのよ。本気かどうか。授業だって最近のはほとんど受けて頑張ってるんだし、たまには先生に迷惑かけたって平気よ。……って、教師の立場の私がこんなことを言ったら怒られちゃうけど。ただし告白して気まづくなっても絶対に、先生のせいにしてたり授業をサボったりしないこと」

私は首を横に振った。

「そんなことしないって」

「約束よ？」

微笑む貴子ちゃんを見て、私も少しだけ笑顔になる。やっぱり自分に素直でいたかった。今の自分が伝えたいと思う気持ちに、逆らいたくなかった。

貴子ちゃんと話をしてから、最初の古典の授業日。私は小テストの裏に、中原に宛てたメッセージを書いた。「質問があるので、放課後に講義室まで来てください」と。

その小テストは帰りのホームルームで戻された。メッセージの下に「OK」と書いてある。私はその紙を丁寧にしまい、挨拶が終わると講義室へ向かった。

今日は学校全体で部活がなく、残っているのは補習をしている一部の生徒だ。講義室のある棟は、ほぼ無人状態。誰かに見られる可能性は、かなり少ないと思う。

講義室に着くと中原は来ていて、教卓で教科書をめくっていた。

「お、来たな」

中原は教卓の前に座るよう促した。緊張しながらも頷き、教卓のすぐ前の席に座る。

「質問ってどこだ？ 教科書、持ってきたか？」

教科書をパラパラとめくっている中原。私は小さく深呼吸した。

「……違うよ。質問がしたかったわけじゃない」

「じゃあ何の――」

「私さ、教師ってホント大嫌いで。中原も教師でしょ？ ウザい菊池と同じようなモンなわけ」

「何だ、それは」

中原は眉間に皺を寄せた。これじゃダメだ。ちゃんと素直にならなきゃ。

「それなのに分かんないけど、中原のことが好きなの」

その瞬間、中原の表情が固まったのが分かった。それでも話を続ける。

「教師って好みで生徒をひいきするし、細かいことですぐ叱るし、自己中だからウザいけど……。でも、中原のことが好きになってた」

そこまですると、次に何を言えばいいのか分からなくなった。自分の気持ちを伝えることに気を取られ、そのあとのことを考えてなかったんだ。

「……先生に何を言われるか、覚悟して話をしたのか？」

「別に、期待なんかしてないよ。そこまで馬鹿じゃないし」
ちゃんと素直になろうと決めてたはずなのに、いざとなると難しい。

「あえて何も言わないでおくよ。その方がいいだろう」

中原は教科書を閉じると、私に向かって微笑んだ。

「まだ若いんだから」

胸がキュッと締め付けられる。私はガタッと立ち上がると、教卓に回り込んで中原を抱き締めた。

「水沢！ 離しなさい！」

「私が教師を好きになることなんて、ありえないんだから。それでも――」

言い終わらないうちに腕をほどかれる。そして中原は、そっと私の頭に手を乗せた。暗に「ごめん」と言われている気がした。

「好きなのに……」

結果なんて分かり切ってたのに、涙がこぼれた。こんなに迷惑をかけて、本当にどうしようもないヤツだと思われているかもしれない。

「さっきは……何も言わないって言ったけど」

中原の声に、涙を拭いながら顔を上げた。

「ありがとな」

たった一言だけど、中原の優しさが苦しいほど伝わってきた。きっと中原なりにきちんと考えて、私にくれた言葉だと思う。それをちゃんと受け止めなくちゃ。

貴子ちゃんの言ってた通り、適当にあしらう教師だっているだろう。よく授業をサボったり呼び出しを受けたりしてる生徒だったら尚更。でも中原は優しく向き合ってくれた。本当はそれだけで、十分幸せなことだと思うから。

「次の授業も小テストあるからな。予習してこいよ。今日みたいに正答率二割なんてことにならないように」

悪戯っぽい笑みを浮かべる中原に、私は「分かってるよ」と答えた。

「今度は満点取るくらいの気持ちで勉強してやるし」
強がりしか言えない。

「期待してるぞ」

中原は嬉しそうだっただ。

「それじゃあ、先生は職員室に戻る。水沢も帰るだろう？」

「……うん」

私は中原の後に続いて講義室を出た。

「ねえ、次の小テストの範囲どこ？」

廊下を歩きながら、隣の中原を見上げる。

「授業で言ったの、聞いてなかったな？ 五組は単語帳の二十ページだ」

教室に続く階段の前まで来たとき、中原は立ち止まった。

「また次の授業でな。気を付けて帰れよ」

私が頷くのをみると、中原は職員室の方に向かって歩き出した。その後ろ姿を、廊下の向こうに見えなくなるまで見つめた。

片思いしてた人と両想いになって、そしたら他の人を好きになって、でもその人への恋は絶対に叶わなくて。それでも私は、自分の気持ちに嘘なんてつけなかった。好きだと感じた人に、そのままの思いを伝えたいと思った。

教師も学校も大嫌いだけど、それでも――今の私の目に映る学校は、それまでの学校と何だか違って見えた。

中原への気持ちは、しばらく消えないままだと思う。授業で会ったり話したりすることがあれば、きっと胸が痛くなると思う。でも、その思いもちゃんと受け止めよう。

苦しいかもしれないけど、何となく大丈夫と思える自分がいる。

よく分からないけど……ほんの少しだけ成長したってことなのかな。

教室に戻る階段を上りながら、覚えたての古語を頭の中で繰り返した。次の小テストのときは、辛い思いをしながらも頑張って勉強したんだって、中原に思わせてやるんだから。そんなことを考えたら、ほんの少しだけ足取りが軽くなったような気がした。

（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1036v/>

STEP

2011年11月17日01時03分発行